



早稻田大學附屬
 圖書館
 寄第 川田氏寄託
 第 20
 第 3
 出帶許不外
 2994
 32
 8
 二
 四
 集
 本



月ル 87
號 3038
巻 32

ル 8
2994
32

俄羅斯紀聞四集

二

魯西亞國漂流記

海國

○陰奧國杜麻那 石堂東洋坐平 出心海の

若宮九國守 一り部 出心海の 出心海の

秋長紀及水士ホ十六人 出心海の 出心海の

廿七日 出心海の 出心海の

奇同月廿九日 出心海の 出心海の

日 出心海の 出心海の

不乃 出心海の 出心海の

出心海の 出心海の

先石を(宗廟)の祀と風を待く帆を揚ぐやと船
を向者(母)を(女)子の(刻)以り(ま)水風吹来り帆
風なれ(女)よ(ま)帆を張帆と(又)り(女)辰巳の
大風(又)愛り(女)乃(如)波起り船を(り)止(り)
お終(二)と(方)り(一)浪乃下(二)船(り)一(り)舵折
船と(女)や(つ)ほ(く)と(船)も(く)と(せん)か(く)と(せん)と(船)と
一(り)船(り)母(言)波打込(れ)先(船)と(軽)く(せん)と(如)
一(と)橋(と)伐(捨)積(一)不(乃)来(色)を(海)中(一)投(捨)く
船(を)取(り)と(働)一(又)明日(二)日(一)西(乃)大(風)と

愛り(浪)を(畫)と(漏)と(り)海(河)沈(川)風(乃)と(又)又(日)と(一)色(沖)一(吹)放(れ)東(西)乃(方)角(七)難
抱(り)れ(大)神(を)祈(形)と(流)神(窟)と(流)の(一)と(又)百(七)十(里)洋(中)一(出)一(と)神(窟)出(一)と(又)宗(紀)二(回)と
公(を)若(一)め(板)又(船)を(折)れ(と)橋(を)伐(舵)と(折)
れ(一)と(又)と(船)を(圍)よ(り)杆(要)あり(と)各(を)と(又)精(力)と(働)く(と)そ(一)と(又)東(に)又(月)次(一)日(本)
の(地)一(流)れ(去)せ(臨)海(く)一(と)神(を)形(以)佛(と)祈(り)
船(乃)痛(く)海(中)と(漂)ひ(居)一(と)同(月)八(日)

より又一浪風法〜廿五日〜風穏うあ〜又
明日廿六日〜大風吹止時あり〜既又彼れんとする
事一度〜あれ今日を限り乃成こと是悟を極
あ〜〜もか〜せハ美〜一川凌〜事〜も何〜んうと
そ〜〜せを極〜二層川也 そ〜〜せの極縁抄〜葉苞ホ
を縁舟の帆せ〜白指はあすを云
大神ふ〜初〜也を云〜一〜二百七十里乃洋あり
〜〜又〜波〜の〜れ風〜吹れ大洋を洩れ舟〜
又幸〜明〜甲寅正月十日〜載〜一〜廿日大風記
〜〜波の形〜舟を〜る〜止時あり〜船乃極とて打

破〜れ〜ら〜浪〜有れ 水桶の身 又檣を〜打破れ
今〜船中〜垢水乃流ゆ海不〜に人あり〜あれハ是
長縁皆〜形〜波出〜一〜又麻綱とて〜船乃綱
を敷〜下巻り志〜とはを圍う〜海船〜一〜又〜
神宮と云〜一〜又百里沖〜と云又〜り〜月昔
〜〜〜〜もわ〜ぬ大洋〜漂い居〜一〜今〜啗
と濁〜と〜二漏乃腹水〜あ〜濁死〜と〜糲あり
〜〜名潮水と波取体法〜一〜雨降せむ〜と天と
洋〜一〜又〜〜時晴あり〜一〜空縁〜一〜か〜

思ふに雨りりし水の天乃或意の難く事し後り
徹一かの心憐みき事なり一事なれは二回の方
全く一陸地は深ひ多しむる事あり一と
幸か川之形のくがらうある事なれとふし船
板乃とよきと此の傍に水成地一と船く一を晴
れに方と事なり一海氷の色も若り一ぬこ
るし河と云國乃流ありやめは氷多きをん
事あり一やに月都日一毎に神意を那ひ
よ二百里或う二百里或う百に六十里と日一り

陸地へ進くあり一ふ一りり九月九日は神意と
語一よ十五里とあり一なる事二回大に返り方
又明日十日西の方と事なり一海は深く一は雪消
ぬる山をえん一と事なり一雪消はる六月のすよ
まかの心雪降後り一ゆき日本と事なり一
安ん何と云國ありやめは事あり一なる事なり
陸地へ船あり一なる事なり一の本邦へは事なりと
地んやと獨と痛れんを若一ぬ一田よ中を次
中よ事なり一なる事なり一なる事なり一なる事なり

ありとも上階ふまへ——ありとも二川流生延居
るもいりあり——いりや先階よとらんと本船より
渡と沈没ありまを修——小瀬のまへに瀧寄
りまをうりともいり——人乃復めおまをともいり
まをまをまをまをまをまを——明後十日の船破と下
り——本船と人まをいりぬ——船中破れ碎ち
とらとら——まを形の跡り——まをまをまをまを
板まをまをありまをまをいり船のまをまをまを二百餘日
うり四十人の船師通階とらとら——まをまをまをまを

も破れぬまを再いりまをいり序ゆきまを使もか——と二回
親よりれ——ありとら——神もも使うりぬ
まをまをまをまをまをまをまを——とねい
まを 本邦乃地まを也又、吳國乃地まを也神龜
まをのまをまをまをまをまを——と二本の神
龜を大神宮に持ちまをを死てまをまをれは、吳
國乃地と書——龜をまをまを又人まをまをまを
まをまをいりまをまをまをまをまを——神龜
まをを神に持ちまをまをまを死て、國とらまをまを

西十五里と云ふ鬼ノ中りりやあきしく八人里河部河を
 尋えんやと福舟のふりやあき十二日より夜は浪浪
 を過りて日暮世日るる遊風の時を風の如く似せ
 遊風のときハ櫓を立浪荒く又雨降ふ目々
 福舟を陸へ揚京東砂束のけちたもねくおらと
 陸の一日六月二日と云ふと云ふ人の夢と
 かかききおえんか舟を子おん宿はあはれく
 くれい人のとれもれを斬撃ふと云ふと云ふ
 此羽又ハ獣の皮を志しと容顔の怖しことと

皇海軍伊予五月二日
 本日記一と云ふ

破ふへいふは是世の云ふの鬼はあはれけれ陸へ
 としハ忽ち彼鬼お捕へられ陣と云ふんを必定なり
 くれら乃事しと知しと云ふと云ふと云ふ
 親見中妻子を今日選りけりやめり日と船の居
 心やと帆乃新をえる毎は浪をこして待懸しん
 と云ふは世と云ふと云ふと云ふ又今日鬼の為は喰
 られあんとありけりや新標と云ふと云ふの根も合を
 誰と云ふと云ふをゆとりのもあはれけりと云ふ居たり
 一と云ふありては彼鬼と云ふと云ふ人十日人集

皇海軍伊予五月二日
 本日記一と云ふ

とありて〜とありて〜と頻り〜とありて〜
ゆ〜陰〜陽〜とありて〜とありて〜とありて〜
と 函圓乃神の由を〜とありて〜とありて〜
若悪志神鬼二本書て礼洋初念〜とありて〜
鬼を家とて〜とありて〜とありて〜
ゆ〜や〜舟〜を〜舟〜す〜とありて〜とありて〜
ありて〜とありて〜とありて〜とありて〜
是とありて〜とありて〜とありて〜とありて〜
せ〜す〜中〜婦〜人〜とありて〜とありて〜
奥を持有り男子とかありて〜とありて〜
焚けられとありて〜とありて〜とありて〜
〜とありて〜とありて〜とありて〜とありて〜
ゆ〜杯〜志〜とありて〜とありて〜とありて〜
ゆ〜い〜ま〜あ〜とありて〜とありて〜とありて〜
曰曰とありて〜とありて〜とありて〜とありて〜
ありて〜とありて〜とありて〜とありて〜
ゆ〜り〜曰〜方〜とありて〜とありて〜とありて〜
ゆ〜金〜振〜を〜青〜とありて〜とありて〜とありて〜

内入るるれハ因焼ハ火を焚瓢ありの赤洞
の場とをより傍より多獸の骨を次敷一具
氣臭をよ滞よとつくも塔か一ハ家よより
み穀熟せられハ魚多獸の肉を沙煮よ一又々
美り流れよと彫板とをよ一ハ燗より一幸
食すす相三日とよ一幸以み十よりの人來
り何や一尋ふありちあれと群せすこの人
暫く熟一して好深長ハを端舟のを一と云語
進ハ行小舟之舟を携ハ入る報よ字あり被褥を

之亦よ建えを一ハこれハ橋の方よりんと云さし
ゆ二本を除き一本よと一ハ日むとといひ一
ゆ一熟よこれより好別一熟よこれより
これより沈ふハ船長平之流よ此よの去年十
二月息風よ吹放され一よりつら一ハを痛よ
の舟中より病よ取され打却るはつ活費よ借れぬ
本邦乃海中あつハ何色の湊より浦より
とも報を去り醫師を執り業よりとも息風よ一
これと切一ハを境乃孤家されハさねる乃る

も叶ふ人唯代くは松梅うのことりをさうし
又同月八日終は黄泉乃鬼とあり——照——
さうりもさ——きて——も捨棄へさるるさうぬい
そのまじく家を穿ちち聖まきの送りりのまねのを
る——屍を埋免一塚のまとな——年ぬ同月十三
日はありぬれは先は目なうといひ——人ありさ
魯西亜人の居——取——同月終——と被掃舟の
さうりもさよあり同月二日はまを船出——初て
まきまはるもまきまき——もまはるあり大々天大

とありてまへ終——端を靴の形ちよ——と赤
洞を以送り梳き木を彫りくわえを新美鬼を
食とす以て對おさ——足は履とさ——人乃大々
まきまき——と上へ人な海ふはま人を指くアリラと云
こ——りナアツカへナアツカはランラ
ウイの目のかき西宮をさ——て親家
派政女七里まきと云

○ 寅六月廿二日ナアツカへ割り同女は日比布を船出す
はまハアリヲトケし角まよ——て人おし存りく春
械中もまきまき七月六日まきまきラシテウイツケよおま

ナアツカをラン
テレイツケま
のさうり

フストロフといふ
と云ふより

フシテウイといふ家の思存
ツケといふ人と云ふより
より嫁ををさうれも
等一海新多く一既虎アサラシ乃属あり
好んと魯西並乃却下より高船一被済東一
食物も莫新色よ一
一とんりを食すは
の口月す一洋最と一
の云一四の中の人
斗りを食すは
其ふ家ホと云ふ
つしと云ふと業
と極されは又買
の人此代は長
と云ふは傷
あれども利
得越一因て今
因るは一
人の目と云ふ

高の船の以
名ハエスト
ワインチガ
云人あり

其ふ家ホと云ふ
つしと云ふと業
と極されは又買
の人此代は長
と云ふは傷
あれども利
得越一因て今
因るは一
人の目と云ふ

海は魯西亜の都より一万余里の大洋を渡り
 ありありと見えぬ地は乃深氏を憐れむ
 業と中途よりいふに及ばず
 この徳者の志一歳するに終りしれは十二人の
 一回は鮮を揚ぐて一帰は帰るにせしむ
 海は魯西亜の都より一万余里の大洋を渡り
 ありありと見えぬ地は乃深氏を憐れむ
 業と中途よりいふに及ばず
 この徳者の志一歳するに終りしれは十二人の
 一回は鮮を揚ぐて一帰は帰るにせしむ

魯西亜の都より一万余里の大洋を渡り
 ありありと見えぬ地は乃深氏を憐れむ
 業と中途よりいふに及ばず
 この徳者の志一歳するに終りしれは十二人の
 一回は鮮を揚ぐて一帰は帰るにせしむ

色を帯食すは意欲皮を吐きしる影をそと
 戸この海より一昔の舟日輪面波せり
 東を重なり暖火の如く横雲柳川をわたり
 あり固くその身を魯西亜の人より
 こゝろ世界の中心より一歩も歩みしれ
 南の果てをゆくは旋一西南より進むに
 一羽は極寒の地ありて一羽は女上の地あり
 船は一アミセイツカを指し一赤申より針を
 飛ばし海流を三百余里をゆく

吾道海峽の
海路千五百
里

○ 五月十二日又アミセイツカへ ワカト云へる 船を考せ

よりいへるも魯西亜より線道を造ると云伊勢白
子の幸をまう船を此處へ漂ひたり三年の月日
を送りたりとせばいへるもやうに船出
カムサスカを指し申南と航しりるの海路
も三百里余なりと云

○ カンサスカに航し船を考せすヲホフツカをこし

代のうへに航する海路も三百里と云

○ ヲホフツカへ六月廿八日別ふ門へ船をのり入ぬ

い知れも魯西亜より線道を造る取致三百里余在り
るは徳島の南に航しりる交易をする湊なり
船此れ丸木乃二方を削り船溜り合井木の如く
紐を以て繋ぎを造ると大材を造るも船へ並へ厚
や二三人程の舟を並置しり小舟船を造り厚
板を以て板板と着せ出入の口を厚くするその板より
櫃戸を以て背窓の隙を以て造りり舟を造ると云ら
るよりりる舟を造る舟の板は花雲の舟を以て食
る舟板を以て船の舟を造ると云らる大まな舟を以て板

の如くは蘇一と一少一と一用ふあり社所一十
ヶ月初と遷洋ヤ一とヤツコウツカハ割居一と一との
るゆと一と一人て引多れと一と一と一と一と一と一と一と
津を又おハ辰に月には日と一と一と一と一と一と一と一と
ウツカヤ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
よ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
人誰よ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
一との馬一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
明れハ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一ハ波馬十丈と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

○
一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

百軒存一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
ら一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
フツカより一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
病ハ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
ら一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
再ハ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一人のかくもつかく時新——るの懸——く又
も人の身の上の口もあまれとこ思へハ涙と先物く
一回を夢を揚——む——は懸——くこれハ云々
毎せそれともしも実情よむりくハきり——るの
ありれハ——の今——しげの神をもぬ——けふ
こは洋ぬまゆる一ヶ月又及びさふう是よりイリ
カをほ——く——と七月又四月又五月
よ是よりハ村に取あし馬をもし家替く
色新や——ありを申——トノウスアユウチー

是海島すハ七月
三日ハ由と記す

取の人を裁の皮を裁とあ——青西無乃人といふ
大よ別よりイリカウカ^{ルユーツカ}ハ二子ハ百里ありと云
○ 昨十二月廿二日イリカウカハ志取敷之子に白
羽在——紫花の地より鹿毛を毛を友を毛を
園をを——む別を友より毛と傳へく
源氏十口人を口本神司の取ハ肩く也扶持
科と号者一人年二月念二夜ハ八ヶ年の留と
無ふ——と——又天舞織羅紗——は裁
被る風乃衣をも編くは響くぬ食科ハ大ま

是海島すハ七月
三日ハ由と記す

小麦は粉を餅の如く造り餅を喰ひ又
鰯魚乾を塩者炙りて餅の硬きを塩梅と
つる食とちり彼を餅を喰ふ時を常と云く
食す者肉を磁器に置て蒸じ乃如き物を以て
喰ふ磁器ハ 本邦の相焼の如く一々粗
末あり上品の如く他邦より渡来せられた
るは珍きを食たり塩ハ小粟乃井戸より海
水を集めて一々磁器を以て浸す味甜ハ
うー酒を蒸すを磁器一々清酒を醸すを味ハ
ま辛く一々餅を以て又ま一々名酒焼くあり
と一々も他邦より渡り来たるものあり漂民ハ
の肉を以て清く食すもの小麦を焼く精者清酒を
割茶一割高一は目も流乃清酒ハ味ハ炙りて
大に利を得たり茶一類も出衆す小麦小麦ハ
畑に作はれども肥をまうはれ穂むく小なり水
二種の小麦を餅とす本邦の如く味をせす
餅より麻を多く出衆は島を耕す小湫
を以てす湯をこすり

○ 名酒乃酒海玉 イヌハニヤ シハツケと云ふなり味滋酒三年
酒九年酒の熟なり

○ 取作を長十二三寸横六七寸後あり高人の取ハ
石と云葉を此を地形を至家をとてとるとの
に方の地を深く掘り石を入く実を先をこへ
候くよ石と云くとして取とらす実砂あかりのち
取之層と云斗石と云葉を先を取へち幅に正す
取との決くく製くくさる白費を色くく砂の
外よよるふ取地より固く色工石工より人丈
のさるるりも難くく

○ 羅羅葡萄葉の服意柄も有り牛房茄子もく世玉の
人男女も常は椅子もさるりく居る外すとこハ
床よよふ念もさる美の人を表す羅紗裏ハソウラ
リとよ熟の皮を替る中より以下の人を表すあま
くくくく裏も免柄の皮より蒲巻も右より
回くくくく裏もさるの羽を厚は一寸八さるり
よ入皮取替は温より枕もさるく二人取との皮を
さるも裏もさるの羽をへよりさるハ生ぬ枕を俱よ

すかの定まりと獨身のさのハも二人あり枕の
も寝を定みたまふ事——とさ月の情を中——と
夫婦睦愛命あらうん月出——とさ枕を俱——
源外と危——との王命ありと云

○ 婚姻の結ひ整ひぬき——と男女俱ふ事——
和尙よ告げし時和尙男子對——と方々雅
ら女——それを妻——と月経候——と遊業をせ——
ふ——と連海へ——とやと和尙男子作との趣遠ふ
る——とさふれ和尙——と女子對ひ——と

これを又——と生涯の事——と之が末業んや
男おやと和尙女子作の趣——と遠ふるれ——とさふ
れ和尙おさる——と唱ふる——と好酒肴を出——と禮
を交男女を居——と女子又是を交——とさその香
砂せ——と酒を男子と妻せ——と男子又是を交——と
さ香砂——と女子又これにこれを香し——とさ
あ——と婚姻の式を海——と夫婦連之趣——と席り明家日
より——と親族いふ——と更らりを海知善の明友
を口口九百と振——とあふお危——と食意す方より

○ 小兒生るれば他人を名の親と親を人の名の氏字と
 実親の氏字を元合とて、イチといふ字を下は替る
 の國の風俗なり

○ 史死す所時を以て妻身終身を以て史を持するなり
 此又男子も妻死するといふ然り亦妻を一生おす
 猶身を以て身終身を以てあり人の更り奴僕のみ
 故に枕の毛髪の扱ふるもさうなりと云

○ 正月ハ元日は酒肴を以て祝をさす亦辛穢と
 号男女ともは放生とて一日を解の外穢す所と
 深氏ホ元日を伊勢を神文是神船魂神(洗
 茶とては)とて正月晦日は二人合をを祀りて
 之を償ひ 小部乃沙合を以て六廿文換りて
 六百文はありてあり是を國は茶とてをさして
 邦より換来はるなり 償ひ最貴に 大病人
 とてを財に中人はとて粥は煮て喰ひてはんと
 しとも貴財はありてこれを月日ありなり
 也す

○ 世新よ大川とて日なりと評す大派めつ世派とて

種々の疾を産ふ如くは、
い邦よりこれ等の如くは、
種々の疾を産ふ如くは、
い邦よりこれ等の如くは、

○ 醫師乃病者人を療治す所を足は湯水おを
用ひあはるるく病者もは、
脚ふよき病しり

○ 此玉の人おまゝく男々六尺は、
一衣服を中ひとまの人の、
月の中より以下を、

まゝさうゆへうり、
彼玉の合子うり、
る漢のく、
我玉の疾を常服とす、
り

○ 此玉の應訓は、
小吏をカサアカと、
い人回を、
の如く、

の人を親を帯ふ金銀とりく飾りとりく——ま美
麗なり

○ 婿女子を妻妙とるく金銀珠玉を以て耳環を
黄玉を飾りし美麗とてしり

○ 源氏の中は清き湯酒を醸し酒を清く綱と
造る綱と 太郎は因し但浮丸——その糸を
赤地赤の糸はひ或る美濃赤の備人と裁りく
質法をあり——ありは所より年々の年月を
経しは技持合を廳所より興つる所肌よりかよ

を子とも衣服の料をたれいかふ業をか——くま
價とる——ぬびまの人をたれくも採るすは体足の
美思地と——く日言ふしとくは烟まふとく
——長る風後より源氏赤の働を被の玉人く
れとれい二人帯つるもふへ——冠紗を帯織を
帯ひ早られは是を帯服とよまふ冠紗は丈夫
なれは美濃赤は濡れ——時は是色用ひ——
○ 帯は赤紗は濡れはその以はむれは鞆皮を身り
鑲ひ以るく靴乃皮を冠し目と鼻口の所は虎を

ゆ〜被ふ事夏の以後業は病〜一箇の病〜
法〜痛み〜所を眼にの色或は鼻を〜
必思〜病も既脱せんすべしとて醫師より業を
清ひ業〜ぬふ時〜を思と除と瘡なる妙
うり又家を〜を落〜毎〜は業を
一箇も横六人〜を〜丸〜造り〜
をが〜の〜物を店〜野火大を林〜丸の
焼〜あり〜は店〜を防〜あり客来急
の〜あり時〜急〜け設も〜して待〜あり

を業〜す本〜板の二本〜板〜
延〜本〜細〜一〜本〜板の板の本〜
被〜大〜板の板〜
業〜の板〜
〜送〜を被〜持〜板〜
方〜は〜今日〜人の病〜あり

○ 夏六月より六月はあり七月中と〜
は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
業〜を〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

—七月の始より宮に氷水あがり

○ 宮中より河原をたもとよき處ともわたり宮中茶と喫
ちんちんりりい茶碗より茶へ移し飲むを茶と
いふはこれと云ふ器なり

○ 深田水の内は汗流吉次卿よりたつたの病は罹り
—この目を腫れあがり目には強硬な皮着—と云り
のまゆ—と云ふ—と一回は腹痛あり—未だ年
二月廿八日又若—と云ふ—と云ふ—と云ふ—
再い 本邦へ是—と云ふ—と云ふ—と云ふ—
神は新し

佛は祿と云ふと—甲斐しあ—と云ふ死はわれ
里されども魂魄をいぢを去— 本邦は新し
—か—と云ふの起るぬけり—身と大切—
あ— 本邦へは御死を死るを御族へ傳り
られ—と云ふ歎歎—と云ふ息も絶—と云ふ
—は念佛ニと通唱—と云ふ—と云ふ—と云ふ—
揚げは懸—と云ふ—

○ 本邦の御より大なるも度—と云ふ氷と云ふ
氷をを消治—と云ふ氷— 本邦の御より

里の氷の跡の法——石造りの家さう二階乃大
るの二階さうさう知さうさうのさう大あささ
るさう

○ 本邦の人の流をささぢんる流好む國風さう流も
家畜を習を國に家つよ入さるい事業さるを
流され又既よ事さう 本邦の人漂流さう
好さう——彼の國よさる書をさう——人の孫
子あ流りの殺ささう流さ又おうこよ流り——を
す流るり——父さ本邦の娘さ——ささるり——の人

東さう——種さのさうさるさう——海魯西亜の人
さ眼中華ささるさる—— 本邦の人の流さ眼中華
すささう——時数あけさる被國の人とさささ
あささう

○ 雁新さう漂流さ跡らさささう——いひみいれ
いさささるさる——ぬれさささるさるさるさるさ
さささるさるさるさるさるさるさるさるさるさ
わささるさるさるさるさるさるさるさるさるさ
さささるさるさるさるさるさるさるさるさるさ
さささるさるさるさるさるさるさるさるさるさ

禁や〜れ家名改め〜れ今も名無儀ありぬと云り
つらとらひ〜出ぬも信も等〜と宮神乃股を
恙とよ〜神の宮有造よ〜福を衣乃如く度く
任裁〜物を恙〜り食ふゆい肉を月以妻帯り
粧をとりふ日と歎の因を恙異因いり〜の寺乃
なると神ありぬ佛ありぬ板よ画と心面よ掛
垂らり〜も画像人〜も物と又老もあ〜も何と
つらぬねあり信ありぬ彼像あり〜信を湯作
を何ありむ人の藤記と云成え〜よユスホジン

日ふ〜ユウヤイと習ふあり〜いふも昔よ〜日ふ
〜南を河海陀佛と云ふと回〜もろありと云ふ
日ふ〜ユウヤイと云辞をゆ〜れ〜も昔よ〜ら

此

○ 曆も万年曆〜〜何れも年を授〜も昔よ〜れ〜
一年十二月よ〜〜一月二十日あり〜二月廿八
日を一月と云女九日二十一日の月〜〜同月〜〜床
候と云 本邦と云遠く異材れあり〜夏斗りか
りり曆の文字あり〜あゆ〜ひ〜り〜難〜〜扱又

去承子年の十二月魚尾と噴流され浪とよ深なる
二百餘日あられと日と浪底よ沈み奥の海とちるれ
明日の底の深くさうなるれとまじるを沈せられさ
とて一月日とちる浪も好りてそれとちる

本邦の月日よ遠くさうなるれとて昔西暦よ計りて
二日月とてさうなるれとて定め海月をえんて八月日と
定々の月と毎日とさうなるれとて今月をえん九日とて一年と
二百四十四日と定めとて一年月とて同月廿九日とてか
一年とて一月日とてさうなるれとて今月をえん九

月六日のむえくさうなるれとて今日とて五日とてさうなるれと
洞ひとて五日とてさうなるれとて

○ 魯西亜とて十年余在りて地底とてさうなるれとて知す
或を人は存すてとて書物とて地底のさうなるれとて載
それとてさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとて

○ 或婦人の針糸とて稲の尾とてさうなるれとて荒れ尾のさうなるれ
毛のさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとて
あてとてさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとて
よとてさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとてさうなるれとて

花をもちまを添ふ妙なりまをまある——と
 着るられ 本邦さうな諸君の葉をまあるとす
 比麻の葉はわらもあられを賣ふ——といひ者
 海はまのりやとあはれは形——とひりし
 うり長崎へ寄——とあつた——とま——と
 るうり 本邦さうな大令の價は甚る者なり
 と是く——必定 本邦へ寄りてあつた——と
 よせ六段年魯西亜は在——とを無うはあつた
 船あつた——とあつた——とあつた——と
 それ——とあつた——とあつた——と

○ いまは娘をまへに嫁ぐ意あるのりあれども知を
 娘——とあつたのりあれはまはすす嫁終の
 時——とあつたのりあれはまはすす嫁終の
 孫を嫁らふ——とあつたのりあれはまはすす
 嫁終の明日はあつた——とあつたのりあれはま
 ちみまあられはまはすの親族のあつたはまは
 魯西亜の女子を乳を秘——とあつたのりあれは
 小兒とあつたはまはすの乳を秘——とあつたのり

此説大概誤り
 名を誤る——とあつた
 まはすは誤り
 まはすは誤り
 まはすは誤り
 まはすは誤り

ちるおろそ乳房と極へ丈へ牛の乳を移し一吸せ
言つたより又牛乳ふらまの粉を練り懸し言
はるより國中一統の風俗なり

○ 葉を極上品の製より人々葉が飲時を必牛乳と
かへ喫葉するより

名跡を信し神を濡しきりれ麻衣より
利意の役もせし車の上は葉のこころ形ち補
理し四二人が駕し馬二匹又うこはは又葉を
若陸より豆衣のふちねく小吏護送しそこと

急と食よりまは餅を多く車はゆりゆりへ後
しきりれは是を喰ひ咽濁され水をとぎし
かしし休むよりし車のをきふりしとあく動
揺しし腕痛の痛み遠くよりけふ

○ 本邦の里敷より凡は十里もありしと思ふは
トホウリツカトホウリツカより別ふは本敷敷にふれ余在る麻を
しきりしと官の人政務と司ふと云くしきりし車よ
りりり一時はあつと練きししより同伴の同流を
文法書の二人車の轉ふ者獨り言ふこと早し

よ暇暈送と〜〜〜付くる叶えそれの護送の
小吏よその御守をさしひすし止るを切すはるよ
所〜思今を郊へ出〜や又〜イルエウツカ〜帰
里〜や知らす

○
〜リ〜は〜も直吏ある〜政務を〜目途を〜地を
よ浪を〜あはるの麻疹と地の車よ〜すはる
を籠安〜すすれ〜〜運送を〜るよ〜さ
は政行され〜せん〜れ〜護送の人よ〜か
〜〜は〜ぬ石の巻と出〜〜〜イルエウツカよ

在〜ゆ出はよ入はよ〜も〜善行親族〜りも
原〜晴ひ〜よ〜も〜ん〜知〜せぬ地よ一人所
〜〜の愁〜〜は〜を〜は〜は〜今よ
獨り〜り〜海〜は〜ひぬ〜〜〜石を〜焼〜
岩と〜す〜は〜る〜え〜

○
カサ〜よ〜は〜も〜麻所を〜並友人を〜た〜政
務を〜〜〜心〜し〜あ〜救〜手〜余を〜滞〜あ〜を〜
はれ〜〜〜〜法を〜更〜り〜は〜所〜の〜
よ尊〜の〜回〜ら〜り〜

とてい所を國之の都なりとて市街の
とる知れども 本邦東都のまゝなりと
へ——國之の殿宮在る所を城跡の傳へし
市街の裏に設る方二所中りのみ階地の殿
か——二階目と階目より馬場或は築山泉の
或は樹木を植たりは階五階目よりこれの
りて他——牡丹の園を代種りの造りたる
も——そと大井のりりては述る——新——
りりては述る——東都本邦の築山泉の如く
——りりたるもは階地の傳へしを
を護衛の人を——これを守る所を
の名を考へ板法とす——是は是の築山
りりては述る——

○ 國之の名をラリキサンタラハウロイキユタリと稱す
民十人を國之の府座へ出——と案固と
所を所よりりりたる所の官人階地——
別をこ——と最重は並居り國之の傳へし
ニユウイハイチレサノフとりり人よりり官の人と

又くうりて例は伊勢の玉神昌丸の船子新菟
とくち 本邦の香詞と菟と別居とさうり國
玉母辰并の后妃の椅子とさうり國と漂成
赤膝を座とさうり國と新菟とさうり國と
とさうり國と白ねと菟と懸とさうり國と空振
と海赤う日本陸奥國のりの菟とさうり國と
と流れ来と心憂うかへと船を懸へ本宅へ
送り届へとさうり國とさうり國とさうり國と
お世とさうり國とさうり國とさうり國と
伊と清成とまの口人さ命のありひと難きは合
那り何年 本邦へ海船とさうり國とさうり國と
空をさうり國とさうり國とさうり國とさうり國と
をさうり國との成をさうり國とさうり國と
國へ海とさうり國とさうり國とさうり國と
さうり國とさうり國とさうり國とさうり國と
さうり國とさうり國とさうり國とさうり國と
の適命ゆり今又 本邦へ海とさうり國と
さうり國とさうり國とさうり國とさうり國と

又くうりて例は伊勢の玉神昌丸の船子新菟
とくち 本邦の香詞と菟と別居とさうり國
玉母辰并の后妃の椅子とさうり國と漂成
赤膝を座とさうり國と新菟とさうり國と
とさうり國と白ねと菟と懸とさうり國と空振
と海赤う日本陸奥國のりの菟とさうり國と
と流れ来と心憂うかへと船を懸へ本宅へ
送り届へとさうり國とさうり國とさうり國と
お世とさうり國とさうり國とさうり國と
伊と清成とまの口人さ命のありひと難きは合
那り何年 本邦へ海船とさうり國とさうり國と
空をさうり國とさうり國とさうり國とさうり國と
をさうり國との成をさうり國とさうり國と
國へ海とさうり國とさうり國とさうり國と
さうり國とさうり國とさうり國とさうり國と
さうり國とさうり國とさうり國とさうり國と
の適命ゆり今又 本邦へ海とさうり國と
さうり國とさうり國とさうり國とさうり國と

そらり知物——ぬよ水くひ國よ止度とせしを
——うら務よふゆ——と宣ひ又向とあられす
又色河新苑よ宣ひりかき日本原國のそのよら
殿國よか名所右取るとえす——この命ありて
源よ食後二十枚を振袂時斗を福りぬけ序を
こ階より——びる年てほ色河新苑よ葉田よ
に階ぬ階うこえ——り

○ 國主の兼り——出——時母后后妃もも序よはた——

むひ——とち時兼ふはよは時羽の羽の如き層とてぬり
食派の兼り——時取の押取を纏ひよるゆとせり
又光り耀とより后妃も兼のひ十六七歳とし河
へく英人より——

○ イルコウツカよ八年存り——因 本邦へゆ——揚白

へ——と度い取をこえ——よとま——その沙汰のよ
くと——いりあふぬると色河新苑よ兼りよ——
兼の國主も兼病よ侵され國事——も急り勝
まれの地まの人の兼れよのよハ程更りけし祖
——むひそのまはよ昂むひ——り國氏をを撰

育——うぶや親の子を只ふう如くうれハ祖母を
あそと——女との伊勢の船長を又船又二人を以
てより松島へ護送せしき——事をを元と——
以て稲穀ありれハ何そと田舎と晴ひを学く——
魯西亜の産物をつく——田舎の事と交易をさし——て
國氏の怒ひを救うんと出る儀ハ船を引去る——
手許をを岸船をうんと大友の人へ命をくれ航
評定り以て舟の事——及び——なりうれハ國氏ホハ
かわくも國士の徳のか——ことわとを慈——決する
るまよハ風をかあふ——と音——勿論あり——まよ
をを洋——見るハ人鬼ら何れまよかん——威
けり——まよけかぬる振らう——

○ 三階目の橋の種々の好むあり世界万国の人又多然
英鬼を始の何れう——人愛り——何れちの何れハ
腕腕を握み日々と酒は漬ま存日ハ干——望むれハ
幾百年を経ても朽腐腐らぬ——と——事ハ必
人の肉ハ百十二年に氣被てハ漂流と——陸奥島を必
の船又び必——死と——を干望の椅子に寄せて

まを衣をそそれいも海を千種多し深丸は淑破将の
の致より来りてこれに紙様は利し海裕くそ
まけはま衣のむく早しこれいそは昔く及
ほし入くそひしきりき月夜くまかりひしき二
面の人乃干し海ありし

○ 四月の初まきう遠南よ寄水極まきう次とより南よ
寄くくくくくく又折より月より八九月のころ
まきく海中しゆあくく知字も漢をくく^{ベセルホ}ヒセリ
ホロカの色く格別ゆかり

○ 國を極覽の爲風船を造り航せり其船を丸く
く直徑は百餘しゆあくくこれを造るは其船を
よ骨組しき紙あふよ和編あふよ海りのまき
これを法組二節を毎に結ひ舟人二人をく風よ吹れ
候くとやうし其まき遠よりゆれは昔鳥のそを
翔ふりよまきく好く何地行らんし知れきり
勿論は風船を風よ吹よも吹くすゆきとまきり
自在な飛りよき固くまきの指も有折しゆれ
飛りよを揚ふりよまきりよえし時の風船を数

知らざれども口口政社の軒へりり〜〜〜
の序り〜〜〜
客舎に在り〜魯西亞人の内傭りて舟を棹と
舟を法風船を名づる〜
の揚ふり國棟より浪巻の先〜
程り〜
その序り〜
焚き燭りを思ふありと流し〜
の在り〜市街〜
此の序り〜
此の序り〜
此の序り〜

○ 我場もも年々衰へて俱々〜
よ硝子障子を建は年々〜
ては故よ七色の幕を法風〜
と云わし〜
本邦の如く男斗り〜
まりびるを〜

こころ

○ 小人衆の人衆とて一國とあり一人を扶持し一ちれぬ
 小人小身とて一丈三尺は音聲も低く一葉の女七葉
 一葉とて一人も能く久し〜骨節は又短き〜れ
 生風俗も是く〜色も〜一休齡を以て
 歳を治ふ〜あれとび小人も長寿なり〜
 とす〜

○ 日月にか〜長宗はあめれい志若の男女老幼と
 あり〜縁糸の所よりち群れぬ〜遊楽〜酒肴
 を家なき降鳴ふ所 本邦は習ふる〜これ〜
 の所へも水車の如きあ〜是れ乃人を宗を後を取〜
 其車をせす〜我れあ〜も心人ともあり

○ 所〜水車を仕掛白〜音を移し換すあり
 ○ 海嵐もか〜い河れと咆を〜も〜貝打ひち
 一切あり〜

○ 兼盤も〜り地多〜し上りよあ〜一樹十あり
 あり〜

○ 馬も〜りあ〜り〜白〜啼あり

鳥の如くあれども舞をうれり

○ 船を造るは、その船を四角に作り、牛にせしむり

海賊皮を外の色り、内は諸ふを敷く。長二百程の
角あり。船身は、水に浮り、長崎へ被角多く滑り、
船身と称し、高より、せり

○ 小船は、船を三つに分れ、船をうり、その舟を舟の
あり

○ 郡より二十七里を隔、ふ、酒之納涼の亭あり

その道、路の廣石あり、石を交連し、縁あり、海とあり、水は

を踏む、水の音あり、波を拍、左右は石垣とあり、水は

石戸をひくく、水とあり、源の音と十里、池あり

清涼の海水を流し、その傍、ふ、廿二人は、本丸、廿二

才斗りの、清涼の、造り、その傍、ひ、を設け、南の方

より、松檜柳、杉、榎、林、を、築、き、邦、乃、海、舟、を、新、極、な、

ふ、う、ち、並、へ、そ、る、色、り、の、硝、子、を、建、ち、ま、

花、宴、の、足、邊、所、を、構、へ、う、り、深、氏、お、始、め、る、足、り、

を、儲、り、目、を、結、ぶ、を、う、り

○ 権衡の棹の、ま、中へ、紐、を、設、け、あ、方、へ、と、か、ま、さ、て

そとまゝはひか洞の貴目甲乙まゝく目方を量
ふり

○ 國之色町の市街まゝ市中は橋二あるまゝと切石を
敷きまゝりいそ石のところ平人踏みと掃き國を
通りやうけ耐え証済まへの習わを習ふまゝ
まゝ人をあまあまのまゝ形くまゝは種まゝ
まゝ

○ 色洞新流今を都下は便まゝ金二百六十枚の
種を揚り 本邦の文字をあまひ子供十はみ人
を新りまゝりまゝ書き彼も友まの娘まゝり十
二歳まゝる女子ありい女まゝまゝりまゝり
生れまゝりまゝ次を男子まゝりまゝり
く色洞を新りまゝりまゝりまゝり金百二十枚を増
揚りまゝりまゝり色洞新流都下は便まゝり
あり安堵の思ひをまゝりまゝり色洞新流うけまゝり
船子いそまゝりまゝりまゝり在敷中まゝり病死せ
あり

○ 國一の寺あり本堂の正面は建りまゝり板は長さ八間

林のうろたまりと新築のうろたまり

○ 竹ハ絶てありー魯西亜國の玄葉粗友よ奉く

一ヲセン ニドツ 三 テイレ 四 テヤテウイーぬピアシ 六セ

イレ 七セイム、八ヲセム 九ゼウエ 十セイセツ 百

ヲロツフ 子 テイセツ

食 一枚ヲセンソロウト 浪 一枚ヲセンセリソロ 浅 一枚ヲ

センカヘカ ④ 食 食海一すは 食と食と食と 表裏浪食と④ ④ 十文浪

二十枚ツ ④ 食 食海一すは 食と食と食と 表裏浪食と④ ④ 十文浪

食一枚を以て浪二十枚を以て川換へて浪一す

なり ④ 浪 食海一すは 食と食と食と 表裏浪食と④ ④ 十文浪

④ 浪 食海一すは 食と食と食と 表裏浪食と④ ④ 十文浪

田輪ヲリニリ月メイセツ 雨 トウシ風 ホユタ火ヲ

キニヤ 云チムラ 王の名ヲリキサシタラホウヤイ千ユ

リタリ

役人をゴロニニチ 申とあて云るりをツカシウ 浪セリ

ヲロ 浪 センキン 洞 メイツナ 神佛 ボウホ 寺セ

リフロ 男ムセリ 女アシナ 木ゼリソ 海モウリ

ウ 川レカ 心ナカラウ 雪 ス子アカ 寒 シトラノウ 船
 セウツナ 大ミテレイ 紙 派 派 ユチイシ 湯 サストハ 湯 湯ノ
 ウセキ 梳 チヤアシカ 葉 葉 キノヤユチヤマレシカ 墨 リヨ
 シカ 茶 酒 ウイナ 麦 ユロハ 紙 フマアカ 牛 ユヨリ 馬
 コウ 墨 ナリンサ 葉 和邦の葉 葉 鳥の羽の葉 羅
 菊 ウイナカ 人 参 モロユウ 葱 ロツユ 烟 葉 タンバア
 烟 葉 金くま トロフエ 葉 和邦の葉 スツハリ 記 記
 を シタハイ 花 花 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 カ
 ウルタ

○ 漂民ホリ初々漂ハ寄——ランテレイツケ ランテレイツケと云ふ事あり
 魯西亜の都を——あり——と獣皮を交易し流り
 居——商人の事情は固まり地をよびて國との
 融よき——和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉
 人を押育せ——志の深りれ——和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉
 西亜國中に商人の以人はあや——和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉
 口カ出まの葉は——和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉
 人び人のあは——和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉
 とあり——和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉 葉 和邦の葉

國をえきりしあり

○ 魯西亜よりし魂糸あられ六月の内陸の陸
らき寺く福る事一もそれともお那の如く豊棚
を設けと

○ 敵軍のまねの矛先をを防衛の爲を二百余の
階送りのまねを役あり石火矢二百六十挺を役
ふまの村より二百人の軍士をよると云確ハ尻二
ツよし〜二百廿四日とも〜殺入〜しり麻綱
の太さ二八八八す〜しり〜しり地を百人ふ人

よの軍船数多〜しり〜しりイルユウツカ在敵の
中敵國よりあにぞ陣を中〜しり〜しり海
陸の役を敵軍は役あり防戦〜しり〜しり勝利を以〜
とす〜

尾海船のよハ
六月十三日と云へ
〜しり

○ 亥年六月十日 ^{ヘニセルホロツ}ヒセリホロカをえ出川中よま
カナスタの大湊のしり 本邦を陸の船へ約十
六日よま移りし月十八日は機を拘〜しり中を捕〜しり
すの事海路二百里

○ ユツベイカニタンツケとよしりは國別を〜しり〜しり國を〜

以所教一万余りありと存く徳島の商船集會の
大港より船出の地より昭也も教多ありとあり家
の傳りハヒセリホルカも同く一帯を賣大まか
暖よまへぬこゝより積あり一帯を賣大まか
新或も英船の國を調へ同年七月廿八日行し未申
よ計をえ海路も九百里を視る

八月廿二日
八月廿三日

八月九日又アンキリツケへ船を寄候は所一帯國より
こゝ船のまゝ所を教候は九百里ありとあり
より五船へ七日後を隔りて同月十六日船を

出し海路も九百里を己午を指し一帯

- 九月三日カナリヤツケは別家にて馬ハカ一帯の
如き新ありり此は二角と生し多くの板をとり
而邦の麻人ト云ふ又此物ハ結を成りり其色色ハ白
い強くありり同九月九日此を船出し一帯アメリカを
し九百里の海路を己午を視し一帯海と
よむり使節のいふ所をいふと世界のよ中より
と酒肴を酒へ船中のよへ餐し一帯を
○ 十月下旬南アメリカの中エカテレと云ふ湊へ船を寄

せりりひ市の人々多き事よ——て男々 中部の
畜産のめき物と云はれよりとを裸と云はれ
——野人を獲て多くの物をとれ種族の種を云
風呂敷のことと物を肩よりとを足をとけと云はれ
も男女とも縮ぬ——螺ホツタリひと種大團なれ
ひき斗りも——てかか——茶大き小きを此の法教
茶大——法大茶葉も一年も二年も実る唐茶も一年
耕すはと畜産を云と云はれ実を云と云はれ圃を
云はれい 中部の茶園のめ——茶の多かれといふ

ある事よや唐茶を云はれ——焼くも常の
食料よ元のめき物をい——魚——と云はれ
——造り——もる種も木の皮も——昔は椰子
こいよのめ——て茶も新き衆生海産物の地
ま——久——て恒りよ茶——又産物の地なりといふ
ホルトカル
ホルトカリツケといふ圃よりひき入るり是人は種族す
人もも人をも白——又女の産物人なりといふ
口カリツケの人と圃人と交り出さ——る人といふ
○ 梳き椰子の実を売を用ひ着かふ——本綿も

本より嘆くこれをおく事成りけし此の程を
さしよよ〜〜尾を〜本より〜尾をねは搦
みよ〜〜のほろり又心を死と〜〜六後の魂を
甲より二重はほほけ團は清むすはより四十五日を
内水を汲薪をね積む十二月廿二日をね出〜
〜リケスケとよ申へ向〜〜〜〜〜
節のしひけへけるるる〜〜〜
玉よおふ唇色は靨もれは女人をへけりりとをさ
流の外玉の方へ指〜〜〜
此の若うれをさへを小人を女人團をか終〜
〜〜〜忘れを〜〜
〜〜〜影の跡〜〜
本形〜

○ 子に月には日〜リケスケとよ申へ向〜
子のむら七人曰す〜八人〜及〜婦人〜六人〜
穂天は〜〜〜男子を陽に先人の皮と
細〜系〜〜〜婦人〜細〜系〜
系よそのれ葉をさなれ陰つを〜
〜

ぬきおそ後——と聞たり又れ後節中知を傳へ
波大人のえけう海所をえく水を汲ちる——
このよりより——と聞て大人出たり——の船へ寄附
ある——と石火矢十二口を放ち海水をえり——
カムサツカへ船を向く——船——き——うい海路の何を
とらふるをええへいふ事のより下り
まはるらふせ

○カムサツカ魯西亜より官吏をえいふまはらふ
○年ラニテライツケより商人船よりえられ魯西
亜國へ渡り——討ひるをえり——より又まは

まをえ魯西亜より送ふれか——よりえれを
新の肉類の族を常の食とす地の人をカミシヤ
タとらふ——より松衣へええ——續とて箱飯の漬
ま——四穀母目を獲れハ箱飯は船に傳へといひ
つへ——いよも洋船は海より二十日程——八月廿
船出——東海を航し——とて——より西へあり
陸奥國をえええ又いより西を指し——又日程視すれ
ハ日なれ——といひ——いふ京東海。魯西亜の船中
ハ十一人ありその中より天文地理測量は妻あ人

まきやうれりきハ魯西垂の人と下とあり一國を治る
り一信一曰むとふむう者き甚ゆるりうとあり
あり

○魯西垂國より一里とあり七千人を治る一里とあり
西垂國より一里と稱す 本邦より一國の地を治る百八十
二國二人は甚ゆるりきとあり一丁はすれハ彼處の一里
とあり 本邦の九丁四十とある二人あり

○西垂の桑丘の属國は地りきとあり一里とあり
穀を治る一里の地を治るは是食用はえり

○まきやうれりき又西垂の地を治るは是食用はえり
富商の地を治るは是食用はえり 本邦
の人の地を治るは是食用はえり

○本邦の地を治るは是食用はえり 柳木の地を治るは是食用はえり
一里地を治るは是食用はえり 松木の地を治るは是食用はえり
まきやうれりきの地を治るは是食用はえり 二里の地を治るは是食用はえり
ありしはまきやうれりきの地を治るは是食用はえり 桑花を治るは是食用はえり
まきやうれりきの地を治るは是食用はえり

○マホウツカよりヤエウツカへ百里の道を治る一里

○ 最もやくは東の人ハ糧を齎し聖廟しき色
りすはなり

○ 板屋のせうれい中に出しの付法くきよ觸れ
ハる市販家と好れハ打腐めくきるりりか
くれハ敵ハそのるれかき後ハられハ後家の柳り
重砂極と好ハる中ハの利ををある候り
おれハ出れとさりハ被出ハ跡りハその内
を家ハ痛ハき難又ハをわハるれさりし

○ 市街の西地ハ各坊ハはりさりすハ其福り

○ ありハ二階作りの市ハ二階作りと階作りの市ハ
いふハ階造りハ新と並ハ建ハり寺ハ市街ハ
混ハ在れハし棟ハ二十に間ハし及ハ十文
字ハぬいとのまハり見れハ寺ハ在ハ板
出ハりハあり

○ 魯西圃ハるハ板ハれハ記出ハる粉の餅と食ハ
農耕のまハ田圃ハ住居ハり職業ハすハるハ
業ハるハ農ハるハ圃ハり食ハるハはり職
業ハるハるハ業ハるハ食ハるハるハ

岸へ好産を乞ふ論を——地是らるるなり又又婦
大勢めあふあふ——海へ森る入のり波をメ支
婦——向ひて情をな——とす所へ

○ 津を又あふイルコウツカを乞ふ年の二月七日より——
七十里の道跡を車にせりるよあられ——二十九日
——とセルホロカよ乞ふとせり

○ 雷を祈れども地を震らし——るるあり

○ 美人の命をソウフリの皮を裏に用ひて皮掘痛
色を思ふ——と乞ふ毛より大と一人とす位もあ

○ 又——と乞ふ魚骨西屋の命を十枚祓り——勿
備を乞ふとせり

○ 乞ふ事は法——中り——乞ふのたは月曜事よな
き八月の海口のどろり耳鼻類あを乞ふと乞ふ——と
脱——乞ふ又乞ふと打本は——と乞ふとのま月口
鼻耳あを乞ふ事乞ふを乞ふ——法へと乞ふ乞ふは
朽——朽り骨を法と乞ふと換切と法は——と
乞ふ月は月を乞ふと乞ふと乞ふ乞ふは——と乞ふ
乞ふ事よ中り歌乞ふと乞ふ——と乞ふの彼乞ふ中人乞ふ

よらま

- 船〜イルコウワカ〜王都の道〜村車は驚し
馬は驚れ〜
と寝の〜
付舟のさ中〜
と階〜
つ〜
き〜

- 亥九月九日カナリヤ國を船出〜南アメリカを
さ〜
あり〜
ひ〜
か〜
りり〜

- 亥十二月アメリカ滞船中暑の活〜
れ〜
而れ〜

なりと相殺しきり

○ 亥十二月女と曰アメリカを船出——マリケイスケへ子
は月日と船を寄せたりびるの海路二万九千五百
と二月下旬のひかり——は日数は日福も園夜をの
あちし船く星一面う——又マリケイスケよ
く婦人容色の多形ゆれい女人を放ちやゆ——
魯西亜人のいすはれしこれ虚意を捕——と
すぬきむに彼をい——時をえ——は男かく——
了女子も男子も裸者——はみ人集り交易をんる

ををいその横陽の陰つを深すしゆりす又
恥らしきも船——は中婦女の夫ある我の陰へ
忠ひやうと誘ひ——は魯西亜人ゆり使節——これを
すて釋りたり——は大人も逃出——はれを
一回海中へ飛入て序あり

○ 亥十二月アメリカを船出——は女子は月マリケイスケ
へ到る——はれは船を寄せたりびるの海路二万九千五百
水走——かりりれい彼大人たの病きふ所をえん
極く私よ水を汲んとや——は船をいびるを知り

先ノ船中より退出されしもの送念を致さん
ともや氷を返むるをよしゆへ詮方なけれ
又い彼大人を獲れ入日敷三日の洞夜を
船に船をまゝ酒肴を共に音西丑人の内着
人を婦人といふれゆるあやすはるし許し又
音西丑まゝ櫃の櫃乃後す一隔七八歩の
を二三すすよれてあはれれぬぬを申す
あは氷を返す婦人ホを退出しぬ小史あは婦
を是を抱き又肩より負ふとて海氷に飛

ひ入浮しりし沈りし船のきりきりし源
ぬを入敷凡二百斗りきりし時後節のいふ
酒漬をられし船と色し赤酒をえんしり
船に室より氷をえられし船をよんしをきり
舟を放りししと下知を傳へしを賣目を放ち
るを喜ぶとて船をりしり又りや船のきり
大勢遊さありしゆへ常のよく売石火を放
しりれき運きりしりし七日の洋船
二月十三日舟を運ぶ方の又子也と針とを

船を以て七月下旬カムサスカへ船を入り
一リケイスケより椰子林より氷河波へと渡
せし以彼実を載せしよりし船に持
帰り魯西亜の人ありし船といひ川割みそ
決堤より舟楫と喰せしより大人といひ童といひ
ありしを金せ押割りより是より人のかの船
知れしなり

○カムサスカを船出し東洋を航し魯西亜の
人を同渡し西の方を航し本邦のありしを同

○よ字一富とゆふ名をいひしより船の記念を
入しよ字一富とゆふ名をいひしより

○長崎は新に於て航し北九州よりし
魯西亜國よりわき航路の聖徳道徳の船を
えしやと國のありし被るに在りしをわきの
生類をえしよりありしを名をいひしより

○魯西亜國より航し北九州よりし
ありしをいひしより航路の聖徳道徳の船を
えしやと國のありし被るに在りしをわきの
生類をえしよりありしを名をいひしより

合巻の極を取——硝子鏡をお海り——以二
を中——その外大切は取扱ひ——
二間よりみよ人の硝子鏡は十枚を
お海り——

○ 魯西西國の雁を年中お取し居る——又
家毎も飼をとりを養ひ秋の初——
くま——卵を産ひゆりま——

○ 弓の射の糸あるもの——又おの
糸の糸の糸は糸の糸——

○ 魯西西國の婦人の式日——

を施——飾りとす——これを——
を施——飾りとす——これを——

世書の末は文化之盛年六月中石巻出役の事
津妻より往話をし又七月より津の湊より
歸り往き津の話をし書ありしを記しぬ
きやを編み人の名は之より被澤氏より魯西
臣の屬をいふ澤之をいふ地は入好より近
られて國之の許しを以て寄り送りし
しりのむらじは菫屋の侍監大抵質茂はま
おを使問ししをせしは源氏よりしり
世書郷向の事ししは藤原氏よりしり
世書を閲せんし世書し又一の形ありしと 文政
八年乙酉の七月末つりき東郊の邊氏を記し
々々源氏よりしり

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are difficult to decipher due to the cursive style and fading, but appear to be a form of historical Chinese or a related script. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be larger or more prominent than others, possibly indicating a title or a specific section. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

